

伊藤左千夫 人脈考 (下)

貞 光 威

はじめに

伊藤左千夫の文学的な業績を考えると、「ほろびの光」などの歌を詠み、「野菊の墓」などの小説や「叫びの説」などの歌論をいろいろと書いたことがそれとしてまず考えられるけれども、それと同時に「馬酔木」や「アララギ」を主宰して、斎藤茂吉・島本赤彦・古泉千樫・土屋文明など多くの若い歌人たちに親しく接し、教え導いた業績も忘れることはできない。アララギの諸歌人の活躍は、大正・昭和に至って隆盛期を迎えるが、これも左千夫の新人育成の努力が、この頃になって実を結んだといえるし、彼の歌人としての人間尊重が豊かな実りをもたらしたともいえる。

見方をかえれば、人間としての左千夫は、敵も多く作りはしたが、本来的に人間好きで、人を信じ、情熱を傾けて門下の指導に当たった。そのことの、当然といえば当然の結果であり、この点では、己を持すること固く潔癖で、敵も作らなかったが、門下とい

うものもほとんど持たなかった長塚節と対照的である。

本稿はそのような左千夫の幅の広い人間関係を把握する一つの手がかりとして、左千夫と交渉のあった文学者・文人たちの人物について簡単な解説を加えた上で、左千夫とのかかわりを述べたものである。

体裁としては、それぞれの人物について、「概括」「人物」「作品」の三項目を設け、まず「概括」の項で、その人物と左千夫とのつながりを要約して述べ、次の「人物」の項で経歴を紹介したあとで左千夫との関係をできるだけ詳細に述べ、最後に、▼印の下にその人物の特色ある短歌を一首だけ添えた。なお、人名の配列は五十音順とした。

今回は(下)、すなわちその後半で、土屋文明から蕨桐軒までの分を収めるが、そのあとに、前回、都合であとに回した岡千里の分を付した。

土屋 文明 (つちや ぶんめい)

〔概括〕 高崎中学を卒業した文明は上京して左千夫の家に寄食し牛舎で働いて、彼の世話で一高に進学。晩年の左千夫に最も親しく接して歌の指導をうけた歌人。

〔人物〕 歌人。明治二三(一八九〇)・九・一八。群馬県西群馬郡上郊村保渡田生まれ。父の保太郎は農業のかたわら生糸・繭仲買業を営んだ。明治三十七年に高崎中学入学、「ホトトギス」を購読、俳句をつくりはじめた。同志により「アカネ」の創刊を知り購読、蛇床子じやしょうしの筆名で短歌を投じた。四十二年に中学を卒業した文明は千葉県から転任してきて彼に国語を教えていた村上成之(蟬室)の紹介で上京して左千夫の家に寄食し、その尽力で寺田憲から学資の援助を得て第一高等学校、東大哲学科(心理学専攻)に進んだ。このころ斎藤茂吉、古泉千樫、中村憲吉らと親交を結んでいる。東大在学中に芥川龍之介、菊池寛らと第三次「新思潮」を創刊、戯曲や小説を発表。卒業後は長野県諏訪高女、松本高女の校長をつとめたが大正十三年に職を辞して上京、法政大学予科教授となり、昭和二十七年に明治大学教授となった。三十五年退職。この間、昭和五年には茂吉にかわって「アララギ」の編集発行名義人となり、「アララギ」短歌の現代化に貢献した。

三十七年には芸術院会員に推された。歌集には『ふゆくさ』(大14)、『往還集』(昭5)ほか多数があり、ほかに『短歌入門』(昭12)、『万葉集私注』(昭24ノ31)等の著書がある。文明は晩年の左千夫に最も親しく接した歌人で、そのため彼の『伊藤左千夫』(白玉書房 昭37・7)は、概説風の茂吉の同名の書とちがって、内部から人間左千夫を見ており、左千夫研究のための貴重な文献となっている。なお、『万葉集私注』は、左千夫が『万葉集』の第一巻を手掛けただけで病没して完成できなかった「万葉集新釈」を師恩に報いるために補訂しようという気持ちから書き始めたものと同書第一巻の「後記」で述べている。

▼この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝はひらかず

—「アララギ」明42・9—

寺 田 憲 (てらだ けん)

〔概括〕 千葉県香取郡の歌人。左千夫に歌の指導をうけたが、素封家でパトロンの役もはたした。

〔人物〕 歌人。酒造業者。明治一五(一八八二)・二・七ノ昭和一二(一九三七)・九・七。茨城県筑波郡真瀬村生まれ。本名憲太郎。千葉県香取郡神崎町で酒造業を営む寺田家の養子となった。憲の実父と長塚節の父とが親しかったので憲と節に親交が生

まれ、左千夫は節を通じて憲を知った。左千夫は節とともに寺田家をたびたび訪れて歓待をうけ、所蔵の画幅などを見ている。経済的にも憲から支援をうけるが、それは「馬酔木」「アララギ」の発行費用にとどまらず家計にまで及んでいる。明治四十二年に村上蟬室から土屋文明の上級学校進学について左千夫が相談をもちかけられたときも、左千夫は学資の提供を憲にたのんで一高・東大へと進めるように取り計らった。憲は藤真とならんで左千夫のパトロンの役割をはたしたのである。『左千夫全集』には憲宛の左千夫書簡が百二十三通収められており、二人の密接な関係を示している。憲には歌集『利根川』（明44・1）がある。

▼千葉の野ゆ遠紫のを筑波の山みはるかす秋の日をよみ

—「アララギ」明42・1—

中村 憲 吉（なかむら けんきち）

〔概括〕 「アララギ」草創期の主要歌人で、堀内卓を通して左千夫を知り、親交をもった。

〔人物〕 歌人。明治二二（一八八九）・一・二五、昭和九（一九三四）・五・五。広島県双三郡布野村生まれ。地主で酒造業を営む裕福な家に育ち、三次中学、第七高等学校（鹿児島）に学んだ。七高時代に堀内卓の勧めで作歌、新聞「日本」（明41・1・

26）の左千夫選の課題「竹」に応募して五首が採られた。翌年上京して左千夫を訪ねて入門、「アララギ」三号から歌を載せ、同人となるとともに四十三年東京帝大法科大学経済科に入学のころから斎藤茂吉、古泉千樫、土屋文明、柿の村人（島木赤彦）らと交流した。大正二年七月、柿の村人との合著で「アララギ叢書第一篇」として歌集『馬鈴薯の花』を東雲堂から刊行して写実的作風を基盤にして青春の官能を歌い上げたが、そのあとの『林泉集』（大5）、『しがらみ』（大13）、『軽雷集』（昭5）では清澄で円熟した歌境に達した。大正十年から十五年まで「大阪毎日新聞」の経済部の記者をつとめたほかは家業である酒造業の仕事に従い、そのかたわらで作歌にはげんだ。昭和五年に肋膜炎を病んでから健康がもとにもどらず、九年五月、転地先の尾道で四十五歳で没した。『中村憲吉全集』（岩波書店 昭12・13）、『中村憲吉全歌集』（白玉書房 昭41・8）がある。明治四十一年一月に左千夫は新聞「日本」の選歌欄に憲吉の歌「新酒桶を伏せしかたへに割る竹の竹紙かろく春風にとぶ」ほか五首を選んで載せ、選評において憲吉の写生を基盤にもつ独自の味わいのある歌風を絶賛した。東京帝大に入学した憲吉はしばらく本郷の下宿にいたが、左千夫はそこにしばしば立ち寄ったという。深川の下宿に移ってのちは、近所のこととて二人の往来はいっそうひんぱんになった。

憲吉の「追憶断片」(「アララギ」大8・10)によると、左千夫

は到来の酒を持参して酒をかわしつつ語ることもあったらしい。

二人は二十五歳も年齢がちがいながら親密な交際をした。それだけ左千夫は憲吉の歌才を認めていたともいえよう。左千夫の没後憲吉は春陽堂版『左千夫全集』(大9・10)、岩波書店版『増訂左千夫歌集』の編纂に加わった。

▼戸の外の世のあかつきは海に似てとほく寂しく動きゆくらん

—「アララギ」大元・11—

中村 不折 (なかむら ふせつ)

〔概括〕 絵に興味をもち、みずから絵筆を執ることもあった左千夫が絵画について教えられることの多かった画家。左千夫の葬儀は不折が中心になって行われた。

〔人物〕 画家。書家。慶応二(一八六六)・七・一〇、昭和一八(一九四三)・六・六。本名、鉦太郎。江戸に生まれたが幼時に長野県に移り、そこで南画と洋画の初歩を習い、明治二十年には上京して小山正太郎、浅井忠に洋画を学んだ。二十七年、日本新聞社に入社、新聞の挿絵を描いた。子規が俳句の方法論として写生を取り入れるのはこの年のことで、不折から絵画におけるスケッチについて教えられたことが大きく影響している。三十四年

から三十八年までフランスに留学、ローランスに学び、帰国してからは太平洋画会を中心に活躍した。大正八年、帝国美術院会員。昭和十二年、帝国芸術院会員。歴史画を得意とした。著書には、『画家一般』『不折画談』『六朝書風研究』などがある。六朝風の書にも堪能で、河東碧梧桐やその門下の俳人たちが好んで六朝風の書を書くようになったのは不折の影響である。不折は個人的にも左千夫と親しく往来したが、また「馬酔木」「アララギ」の表紙絵や口絵を描き、『野菊の墓』が単行本として刊行された際には、その装丁を担当した。大正三年に没したときに不折は葬儀委員長のような役をはたすとともにその死相をスケッチ(「アララギ」六の一 大2・11)している。普門院の「伊藤左千夫墓」という六朝風の書体による墓碑は不折の揮毫したもの。

長 塚 節 (ながつか たかし)

〔概括〕 左千夫と節は子規門の双璧。その性格や文学は対蹠的であったが、個人的には終生親しい交わりを続けた。

〔人物〕 歌人。小説家。明治一二(一八七五)・四・三、大正四(一九一五)・三・八。茨城県結城郡岡田村国生(こくしょう、現、石下町大字国生)生まれ。長塚家はその地方の地主で父の源次郎はのちに県会議長等をつとめた地方政治家であった。水戸中学を病気の

ため中退。明治三十一年二月、新聞「日本」に載った正岡子規の「歌よみに与ふる書」に感銘を受けて短歌に関心をもつようになり、三十三年三月には上京して子規を訪れ入門、「根岸短歌会」にも出席して作歌、その人柄や歌才を子規に愛され、左千夫をうらやましがらせた。三十六年には左千夫らと雑誌「馬酔木」を創刊、四十一年の「アララギ」創刊にも参画した。写生文「炭焼のむすめ」（明39）、「佐渡が島」（明40）が好評だったところから次第に散文に力を注ぐに至り、四十三年には長編小説「土」を「東京朝日新聞」に連載した。四十四年、喉頭結核の診断をうけ病魔と闘うなかで作歌を再開、抑制した表現のうちに悲哀をたたえた「鍼はりの如く」（大3）などの連作を発表、独自の歌境を開拓した。全集は『長塚節全集』全八巻別巻一冊（春陽堂 昭53）がある。左千夫と節とが初めて会ったのは明治三十三年四月一日の子規庵歌会の席であった。左千夫と節は十五歳のひらきがあったけれど二人は最初から親密な交わりを結び、それは晩年までつづいた。初対面から一日おいた四月三日の日に節は左千夫の家を訪れており、その後も上京して子規のところへ行く前にはたいていの場合、左千夫の家に寄っている。左千夫宅に泊まって夜おそくまで語りあうことも多かった。二人はまた歌の材料を得るために共に日光に赴いたり葛飾区四つ木の吉野園に遊んだりもしている。

二人の親密な関係は『左千夫全集』に収められた節宛書簡二百四通によって知ることができる。その大部分は根岸庵の歌会や新聞「日本」の短歌募集のことなど歌に関するものがほとんどで、二人は互いに「日本」の子規選募集短歌欄への入選歌の数を競い、率直に歌を批評するという文学を媒介とする親交をつづけた。しかし、二人の歌風は左千夫が主情的で声調を重んじたのに対し、節は感情の表出を抑えて写生に徹しようとするというように対蹠的ともいえる相違を示した。そのような歌風の相違が歌論上の論争となったのが明治三十八年の短歌の写生ということをめぐっての応酬で、節が「写生の歌に就て」（「馬酔木」 明38・1）で、子規の説いた写生の方法をみずからの資質に基づいてさらに細かな一木一草の微にまで及ぼす決意を表明すると、主情的傾向が強くて感情の流露した歌を好む左千夫は「歌譚抄」（「馬酔木」 明38・5）で、歌において写生を徹底しようとする歌に大切な声調が妨げられるから写生の歌は認められないと主張するといった具合であった。左千夫と節とは個人的には極めて親しく交わりながらも、文学の上では一貫して相対峙し、反発することを通してそれぞれ個性的な短歌の世界を築き上げていったのである。

▼小夜ふけに咲きて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ

夏目漱石（なつめ そうせき）

〔概括〕 左千夫が「ホトトギス」に「野菊の墓」を発表したとき、いち早く賞賛の手紙を書き送って左千夫を喜ばせた。

〔人物〕 小説家。慶応三（一八六七）・一・五、大正五（一九一六）・一二・九。江戸牛込馬場下横町（現、新宿区喜久井町）生まれ。本名、金之助。名主の家に生まれ、大学予備門、帝国大学英文科を経て大学院に学んだ。東京高師、松山中学で教えたあと熊本第五高等学校教授となり、明治三十三年にイギリスに留学、三十六年に帰国して第一高等学校および東京帝国大学講師となる。三十八年に俳誌の「ホトトギス」に発表した「吾輩は猫である」が好評で、作家としての名声を獲得、つづいて「倫敦塔」（明38）、「坊っちゃん」（明39）、「草枕」（明39）などを発表した。四十年には教職を辞して朝日新聞社に入り、以後は創作に専念して、「三四郎」「それから」「門」「行人」「こころ」「明暗」などを発表した。大正五年に胃潰瘍のため死去した。漱石は大学予備門で正岡子規と同級で、交友の中で互いに影響があった。漱石の俳句は子規のすすめによる。子規を中心とする俳人・歌人たちの間に文章熱が明治三十三年ごろから高まり、「山会」という文章研究会が子規の家で催されたが、「吾輩は猫である」は子規の

没後に「山会」の中心となった高浜虚子のすすめで書かれ、「山会」の席上で朗読された。「吾輩は猫である」の好評が左千夫に小説「野菊の墓」を書かせる動機となったらしい。この小説が、「ホトトギス」（明39・1）に発表されると、漱石は早速左千夫に宛てて「拝啓只今ホトトギスを読みました。野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しく、野趣があって結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい」云々と賞賛の手紙を書き送った。これに対し左千夫は早速、「ご書面にて拙作への貴評実に嬉しく候」と礼状をしたためている。当時文壇で評判の高かった漱石からはめられたことに左千夫は自信を得て、次々と作品を発表してゆく。漱石は右のような手紙を書いたすぐあとで森田草平や鈴木三重吉に「野菊の墓」を読むように勧めている。これを見ると漱石はこの作品に好印象をうけ、相当高い評価を与えたものと考えられる。なお、漱石が左千夫にこのような手紙を送ったのには、左千夫が漱石の親友である子規の弟子であり、また漱石と左千夫とは「山会」の会員同志でもあって親しみを感じていたことが関係しているであろう。しかし、同年三月に左千夫が「馬酔木」三の三に「与謝野晶子の歌を評す」を発表して晶子の歌を徹底的に批判したとき、漱石は草平宛に「左千夫が昌子（マコ）を評したのを見て明星で『これほど本人の魯鈍を発表せるものなし』

とか云ふて居る。左千夫が見たら怒るよ。元来左千夫なんて歌論杯出来る男ではない。只子規許り難有がつて自ら愚なうたを大事さうに作つて居る。」といい、醒めた目で左千夫を眺めてもいる。左千夫が大正二年になくなったときには漱石も葬儀に参列したらしい。会葬者のものと見られる名刺の中に「夏目金之助」というのがある。

日原 無限（ひはら むげん）

〔概括〕 根岸派の地方歌会としてよくまとまり活動した甲州の「楓会」のリーダー。

〔人物〕 歌人。明治一八（一八八五）・一・一〇昭和五（一九三〇）・五・三。山梨県東山梨郡松里村（現、塩山市）の地主の家に生まれた。本名、文造。同じ郡内に住む歌人岡千里とともに左千夫に師事し、根岸短歌会に加わり、明治三十八年に「楓会」をつくった。この歌会は根岸派の歌人を東京から招いて「御嶽歌会」を開いたり、「比牟呂」に拠る信州の歌人たちと交流するなど根岸派の地方歌会の中では、信州・沼津・浜松などと並んで活発な活動を示した。「馬酔木」に無限が作品を発表するのは二巻四号（明38・7）から。明治三十九年十一月に甲州を訪れた左千夫は無限の家に泊まっている。大正二年に左千夫が没した後、無限は

「アララギ」に歌を載せなかった。地元の藤木信用購買組合の組合長をしたこともある。晩年は東京に出て深川の永代橋の近くで小さな料亭を営んだ。

▼葦立ちし夏菜の花は五月雨に撓みしままに土にひぢたり

―「馬酔木」明41・1―

平 福 百 穂（ひらふく ひやくすい）

〔概括〕 大正画壇に活躍した日本画家。結城素明を介して早くから左千夫と交渉があり、「馬酔木」「アララギ」に歌を載せた。

〔人物〕 歌人。日本画家。明治一〇（一八七七）・一二・二二―昭和八（一九三三）・一〇・三〇。秋田県仙北郡角館町生まれ。本名、貞蔵。父の穂庵も日本画家であった。明治二十七年、上京して川端玉章の門に入り、結城素明を知る。三十二年、東京美術学校日本画選科卒業。翌年「无声会」が結成されるとこれに加わったが、この会は当時日本画壇の主流であった理想派に対して起こったもので、青年画家たちは写実主義の推進を目指した。四十年、国民新聞社に入社、スケッチを担当しながら「アイヌ」「鴨」などの日本画を描いていたが、大正六年、文展に「予譲」を発表して特選となったところから画壇にゆるぎない地位を占めるに至った。昭和五年にヨーロッパを巡遊のち帝国美術院会員、七年に

は東京美術学校教授となったが八年に五十七歳で没した。百穂は明治三十五年、素明につれられて初めて左千夫を本所茅場町の自宅に訪ねた。「馬酔木」には三巻六号(明39・10)から出詠、「アララギ」にも引き続き発表した。歌集に『寒竹』(古今書院 昭2・11、増補版 岩波書店 昭20・10)がある。写生を重んじた枯淡な歌風で、豪宕な万葉調に特色がある。装丁にもすぐれ、「アララギ」の表紙や挿絵の筆も執ったほか、長塚節の『土』・『長塚節歌集』、島木赤彦の『氷魚』、唐草模様の「岩波文庫」の装丁なども行っている。大正二年に左千夫が没したときには百穂はその死顔をスケッチしている。「アララギ」二七巻四号(昭9・4)は「平福百穂追悼号」となっている。

▼甲斐が根に北斗傾き天の原顧みすれば夜は明けむとす

—「馬酔木」明39・10—

堀内 卓 (ほりうち たく)

〔概括〕 左千夫がその歌才と人柄を愛した信州の歌人。左千夫は卓をモデルとして小説「廃める」を書いている。

〔人物〕 歌人。明治二一(一八八八)・四・三〇 明治四三(一九一〇)・一〇・一七。長野県東筑摩郡伊勢町(現、松本市中央)に医師堀内桂造の長男として生まれた。本名、卓造。松本中学を

経て鹿児島第七高等学校(造士館)を卒業。京都大学入学を前にして病没した。七高では同級に中村憲吉、橋田東声らがあり、卓のすすめで憲吉は「アララギ」に入った。左千夫が卓に初めて会うのは明治三十九年八月の、第二回目の信州入りのときで、その際に卓の家を訪れている。卓の歌が「馬酔木」に載るのはその年十月発行の三巻六号が最初で、その「故郷を出づとて」と題する歌は初心とは思えぬ詠みぶりである。左千夫は四十年十一月十四日付の卓宛の手紙で「斎藤茂吉君は理想派也、貴君の作意は自然派なり。小生ハ御両君に望む所甚だ大なり」と述べて期待したが、病魔におかされ世を去った。没後の「アララギ」三の九(明43・12)には巻頭に卓の遺影、四十ページには左千夫の追悼のこゝとば「堀内卓君を悲む」が載っている。この年十月二十七日、第八回目の信州入りをした左千夫は堀内家を弔問、墓参をした。後日、「深厚院釈即証道果居士」という卓の墓碑にも筆を執っている。左千夫が雑誌「新小説」(明42・1)に発表した小説「廃める」は当時まだ七高の学生であった卓をモデルに、医科大学の学生として書いている。左千夫は胡桃沢勘内宛の明治四十二年一月十日付の手紙で「拙作『廃める』は仰せの如く堀内に見せるつもりで書きしものに候。余りに堀内君に同情致し候為め作物としては飽きたらぬふし多く思はれ候。」と述べている。また、「アララ

ギ」四の二（明44・4）に発表した「冬のくもり」の中の「我がおもひ深くいたらば土の底よみなる友に蓋し通はむ」などの歌は卓を思つて詠んでおり、左千夫の悲しみがうかがえる。

▼天地に若やぐ心ありといへどいたつき負ひて脚たたずけり

—「馬酔木」明41・1—

楨 不言舎（まき ふげんしゃ）

〔概括〕 根岸派の地方歌会のうちで信州の「比牟呂」について活発だった沼津短歌会の主宰者。

〔人物〕 歌人。医師。明治元（一八六八）・六・一四〜昭和一七（一九四二）・六・二四。静岡県駿東郡小諏訪生まれ。本名、

豊作。東京湯島の済生学舎に学び、医師となって沼津で開業した。

「馬酔木」は創刊号から購読、明治三十六年七月発行の二号から歌を載せており、同年十月には木村秀枝、間宮黄庭らと沼津短歌会を結成、毎月、不言舎の家で歌会を開いた。歌会の結成を知った左千夫は十一月二十六日付で不言舎に「沼津短歌会成立相成候由、大杯をささげて祝賀申上候。同会歌稿馬酔木掲載の儀は却て野生らの熱望に堪へざる所に候。」と地方歌会の誕生を喜んでいる。第一回の歌会の詠草は「馬酔木」七号（明36・12）に載った。この年十一月十四日、左千夫は蔵真と東京を発って浜松・名古屋・

奈良・京都を巡遊した。このときは「沼津を過ぐる時心の内にて不言舎に寄す」と題して「沼津のや千立ち百立つ家烟いづれを君が家とかも見む」と詠じただけで通り過ぎたが、三十八年三月には不言舎に招かれて十一日から十四日まで沼津に遊んでいる。「沼津小遊」（長歌一首、短歌二十七首）、写生文「千本松原」はこのときの作。この年八月にも不言舎宅で開かれた講習会に赴いて講話をするなど、その後も左千夫はたびたび不言舎の家を訪れている。沼津短歌会の合同歌集に『沼津風』（明41）がある。なお、明治三十七年九月から四十年四月まで豊橋から根岸系の短歌・俳句雑誌として「甲矢」が刊行されているが、不言舎はこの雑誌に創刊号から短歌ならびに「不言舎漫筆」を載せている。

▼霜けぶる入江のさきの燈火のかそけき真夜を雁鳴き渡る

—「馬酔木」明36・12—

正岡子規（まさおか しき）

〔概括〕 左千夫が「絶対的人格」の持主として尊敬した指導者。左千夫は文学だけでなく処世についても教えを受けたが、一方、病いのあつい師のために献身的な世話を惜しなかった。

〔人物〕 歌人。俳人。評論家。慶応三（一八六七）・九・一七〜明治三五（一九〇二）・九・一九。伊予国温泉郡藤原新町（現、

愛媛県松山市新玉町（生まれ。本名、常規^{つねのり}。幼名、処之助、のち升^{のぼる}と改めた。号は子規のほか、瀬^{だつさいしよ}祭書屋主人、竹の里人など。松山中学中退後、明治十八年に大学予備門入学、東大国文科に進んだが、二十五年に中退して日本新聞社に入社した。二十五年ごろから新聞「日本」を足場に俳句の革新運動を推し進めた子規は、三十一年に同紙に「歌よみに与ふる書」を連載して和歌革新運動に乗り出し、翌年には「根岸短歌会」を結成、『万葉集』の質実な歌風を継承し写生の方法によって作歌すべきことを説いた。門下に左千夫・長塚節・蕨^{あざみ}真らがいる。子規の没後に刊行された「馬酔木」、およびその後継誌「アララギ」は、子規の歌風を継承している。子規はまた文章の革新にも熱意を示し、視覚による描写を基にした写生の方法によるべきことを説き、「山会」と称する文章研究会を明治三十三年から開催した。参加者は高浜虚子・坂本四方太・寒川鼠骨・伊藤左千夫などで、夏目漱石も子規没後に加わっている。肺を病んで何度も咯血した子規は晩年には傷椎骨カリエスを併発して寝たきりの毎日であったが、そのような生活の中で右のような仕事を進め、明治三十三年九月十九日に三十五歳で没した。歌集に『竹の里歌』（明37）、全集に『子規全集』全二十二巻、別巻三（講談社 昭50/53）がある。左千夫と子規との交渉は、明治三十一年二月に左千夫が「非新自讃歌論」

と題する一文を子規の関係する新聞「日本」に載せ、それを子規が「三たび歌よみに与ふる書」で批判したときに始まる。初めて二人が会うのは三十三年一月二日のことで、前年の十二月に子規が「日本」紙上に「新年雑詠」の題で短歌を募集、これに応募した左千夫の歌が三首入選、元日の「日本」に載ったのをきっかけに左千夫が根岸の子規の家を訪問したものである。歌会には十七日の会から出席している。この年子規は三十四歳、左千夫は三十七歳で、左千夫の方が三つ年上であったが、左千夫は歌や文章など熱心に子規から学んだほか、病いあつ子規のため生活の細部にわたって親身の世話を怠らなかった。左千夫が子規から受けた影響としては、短歌においては写生による作歌法を学んだことがあげられる。左千夫は子規に入門する前は歌の調べを重視して万葉集の柿本人麻呂風の歌を詠んでいた。ところが子規から写生ということを学ぶと「うち橋のあなたこなたのあやめ草尖る瑞葉に露光る見ゆ」（明34）のように調べよりも視覚的描写に重点を置いた作品が加わる。左千夫は生来主情的傾向が強く、感動をゆらぐような声調で詠嘆した歌人であるが、しかし、そうした歌の典型とされる「二月二十八日九十九里浜に遊びて」や、「ほろびの光」などの歌にも、左千夫的声調の奥に、子規から学んだ事物の尊重とその写生が実行されている。また、左千夫は子規の主宰

する文章研究会の「山会」にもはいり、写生という方法で自己の体験を文章に表現することを学び、子規の没後もこの会に出席して研鑽をつづけ、写生文から出発して「野菊の墓」などの好評を博する小説を書くに至った。このように指導をうけた子規に対して左千夫は、「竹の里人」「絶対的人格」「吾が崇拜する子規子」「子規正岡先生」などの文章を発表して、「絶対的」ともいえる敬仰を明らかにしている。

▼瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

―「日本」明34・4・28―

三井 甲之（みつい こうし）

〔概括〕 東大学生のとき「馬酔木」に歌を寄せ、左千夫に親鸞聖人の教えを吹き込んだ。その歌と信仰にほれこんで自身の後継者と考えたのは左千夫一代の過ちで、大きく裏切られる。

〔人物〕 歌人。評論家。明治一六（一八八三）・一〇・一六（昭和二八（一九五三）・四・三。山梨県中巨摩郡松島村（現、敷島町）生まれ。本名、甲之助。一高を経て東大国文科卒業。一高在学中の明治三十七年、東京本郷森川町に求道学舎を開いて親鸞の教えを説いていた近角常観の説教を聞いて感化をうけ、同年四月「馬酔木」に宗教的な歌を発表、根岸短歌会に入会して左千夫を

親鸞信仰に導いた。歌は「秋海棠花咲き出でてくれ竹の根岸の底に秋三たび来ぬ」などのように清新であり、評論にもすぐれていた。左千夫は甲之にほれこんで、「同君ハ実ニ吾々唯一の後継者にて彼を得て僕も漸く安心するを得たり。」（長塚節宛 明治38年11月16日付書簡）と全面的に信頼した。四十一年一月に「馬酔木」が廃刊になって、二月に同じ根岸短歌会から「アカネ」が甲之の編集で発刊されることになったのも、短歌会の運営を甲之に全面的に任そうとしたためである。ところが、甲之はたちまち生来の独善的な偏狭さを示すようになり、夏目漱石、与謝野晶子らを猛烈に攻撃し、左千夫をさえも、鷗外の観潮楼歌会に出席するのを「権門に出入する」といって非難するありさまだったので、左千夫やその門下が怒り、藤真が四十一年十月に「アララギ」を創刊すると多くの歌人が「アカネ」を去って「アララギ」に移ったので「アカネ」は四十二年六月号をもって休刊に追いこまれた。大正中期ごろから国粹主義的な活動をするようになり、十四年には蓑田胸喜と組んで「原理日本」を創刊、ついで昭和三年には「しきしまのみち会」を結成、徐々に右翼のイデオログの役割を果たすに至った。昭和二十八年没。著書には詩集『消なば消ぬがに』（明40）、評論『和歌維新』（昭17）、『三井甲之歌集』（昭33）などがある。

▼西空の夕焼雲は消えゆきて風呂焚く家の森かげにみゆ

―「馬酔木」明38・1―

民部里 靜（みんぶ りせい）

〔概括〕 左千夫とほとんど同じ時期に「日本」「馬酔木」「アラギ」で作歌活動をした根岸派歌人。

〔人物〕 歌人。銀行員。明治一四（一八八一）・一〇・一三一

昭和五（一九三〇）・五・二三。島根県能義郡赤江村生まれ。東京専門学校政治経済科を卒業したのち日本銀行に勤めた。東京専門学校在学中の明治三十三年、子規選の新聞「日本」の短歌募集に応じ、「馬酔木」には二号から作品を載せ、「アラギ」の創刊の際には編集同人として活躍、選歌もその一部を担当した。住まいは東京の茗荷谷にあり、ここでたびたび「アラギ」の歌会が開かれた。作品は俳趣を帯びた叙景に特色を見せる。大正元年、日本銀行を退いて故郷の島根県に帰り、村長、郡会議員、安来殖産株式会社社長等をつとめた。歌は大正元年十月発行の「アラギ」四巻九号まで載せている。

▼下暗き杉の林を過ぎゆけば落葉掃き居る寺に出にけり

―「日本」明33・2・11―

村上 蟬室（むらかみ しむろ）

〔概括〕 左千夫の郷里の成東中学の国語教師で、「馬酔木」「アラギ」に歌を投じ、左千夫と親しかった。

〔人物〕 歌人。俳人。慶応三年（一八六七）・九・二七―大正一三（一九二四）・一一・三〇。尾張（愛知県）東春日郡印場村

（現、尾張旭市印場）生まれ。本名、成之。俳号、蛎魚（いぎぎよ）。浅見家に生まれ、村上家の養子となる。文部省検定に合格して国漢の教師となり、佐倉、成東、高崎、名古屋の各中学校で教えた。俳句は新聞「日本」で「獺祭書屋俳話」を読んで関心を高め、子規、鳴雪の指導をうけた。高崎中学教諭のとき同地の村上鬼城を知り、「紫苑会」を興して句会を開いた。短歌も子規の生前に新聞「日本」に投じていたが、成東中学の教師をしていたところから同地出身の左千夫に親しむようになり三十六年九月、本所茅場町の家を訪れ、その年十二月発行の「馬酔木」七号から歌を寄せるようになった。その後も蟬室は左千夫宅をたびたび訪れているが、左千夫も成東中学に蟬室を訪ねて舎監室に一泊して共に歌を詠んだりして親しく往来した。高崎中学時代の教え子の一人に土屋文明があり、作歌を指導した。四十二年二月、文明が中学を卒業する際は蟬室は左千夫に頼んで彼の家に寄食して牛舎に働きながら一

高で学べるよう取り計らった。左千夫は明治四十四年から四十五年にかけて「東京日日新聞」に長編小説「分家」を発表したが、そこに登場する、前に成東中学の教師をしていた人物で、主人公が私淑して感化を受ける「上村先生」というのは、蟬室すなわち村上成之をモデルにしていると考えられる。この人物名は最初、「村上先生」として新聞に発表されたが、途中で蟬室が苦情を申し出たため「上村」と改められた。「分家」を読むと左千夫の蟬室に対する信頼がうかがえる。晩年は故郷の名古屋中学の教師をつとめた。没後に歌集『翠微』（古今書院 大14・9）が刊行された。

▼久方の雨のをやみを見さくるや三日月の湖雲間より見つ

―「馬酔木」明40・3―

望月 光（もちづき ひかる）

〔概括〕 左千夫などに歌才を惜しまれつつ二十七歳で逝った信州松本の歌人。

〔人物〕 歌人。明治一八（一八八五）・九・九―明治四四（一九一一）・一・二五。長野県東筑摩郡島内村（現、松本市島内）に学校教師望月弥一郎の長男として生まれた。本名、光男。東京美術学校に学んだ。松本の「あさは会」同人。「比牟呂」を経て

「馬酔木」には二巻三号（明38・5）から毎号欠かさず出詠した。二巻三号には十二首が載った。三巻六号（明39・10）では、「左千夫いふ、望月君の達吟は驚かざるを得ず。毎号必ず五、六十首を降らず、今回の如きは百十首を算す。常に新意を求めて倦まず、語法句法自然に整ひ来るの趣あり。言ひ難き新意を顕すによく自己の工夫せる調を用ふるが如き進歩の蔽ふべからざるものあり。」とその精進を賞賛している。二人の初対面は四十一年五月の左千夫の第五回目の信州入りのときで、その後も二回会っている。堀内卓とともに左千夫の嘱望が大きかった若き信州歌人であったが、光は入会したころから既に胸を病んでいて、それが悪化して四十四年一月二十五日、二十七歳で没した。「アララギ」四の四（明44・4）巻頭には彼の自画像が載せられている。左千夫は第九回目の信州入りのときに光の墓に詣でている。大正二年一月の光の三回忌には左千夫の筆で墓碑が成った。

▼うつそみの人等は遂に死にすることはかなきことを病めば思ひぬ

―「馬酔木」明40・5―

桃沢茂春（ももざわ しげはる）

〔概括〕 左千夫と同じころ子規庵の歌会に出席して共に歌を作った初期の仲間。

〔人物〕 歌人。明治六（一八七三）・一・一四～明治三九（一

九〇六）・八・二七。長野県上伊那郡飯島町生まれ。本名、重治。

東京美術学校に学んだ。歌は初め黒川真頼に就いて学んだが、大八洲学校に通っていた関係で岡麓、香取秀真に誘われて子規庵歌会に明治三十二年十二月三日に開かれた第八回から出席している。

三十三年一月から十二月に至る茂春の「庚子日録」には子規庵歌会のこと記されており、歌会の貴重な記録となっている。左千夫とは三十三年一月の歌会で知ったが、三十五年ごろから結核を病み、療養のため伊勢に去って、三十九年八月二十七日、桑名病院で三十四歳で没した。同年十月発行の「馬酔木」三巻六号の巻末に左千夫は「茂春桃沢重治君去八月二十七日伊勢の桑名病院に歿す。根岸庵歌会の当時、每次相会して談笑せるも、今一人を失ふ。謹而之を讀者に告げ茲に哀悼之意を表す。」の文を掲げ、十二月発行の七号誌上には「茂春子を哭す」と題して、「とこしへに相さかれき伊勢の海を病によしとゆきし君はも」ほか四首を載せている。

▼迎火の芋がら燃えつきて残る火の灰の白きに雨ふりいでぬ

―「日本」明33・7・15―

森 鷗外（もり おうがい）

〔概括〕 本郷千駄木町の自邸観潮楼に左千夫・鉄幹・信綱らを

招いて「観潮楼歌会」を催し、歌壇に影響を与えた。左千夫が没したときには「アララギ」のために「伊藤左千夫年譜稿」の筆も執った。

〔人物〕 小説家。翻訳家。陸軍軍医。文久二（一八六二）・一

・一九～大正一一（一九二二）・七・九。石見国（島根県）鹿足

郡津和野町生まれ。本名、林太郎。第一大学区医学校（東大医学部の前身）卒。陸軍に入り、医務局長、軍医総監をつとめた。明治十七年から二十一年にかけてドイツに留学。帰国後の二十二年、

「しがらみ草紙」を創刊してハルトマン美学によってわが国の文芸の啓蒙革新をめざしたが、その後も、創作、翻訳、評論に活躍してその近代化に大きく貢献した。主な作品に、小説「舞姫」

「雁」「阿部一族」「渋江抽斎」、翻訳「即興詩人」「ファウス

ト」などがある。短歌の方面では、明治三十九年に常磐会とぎわを興し、これには山県有朋・賀古鶴所・井上通泰・佐佐木信綱・小出繁・大口鯛二らが加わった。四十年には観潮楼歌会を興したが、これは当時の歌壇において新詩社と根岸派とが鋭く対立していたところから、鷗外が両派を接近融和させて「国風新興」を実現しよう

とそれぞれの派の代表歌人を本郷区駒込千駄木町の自邸観潮楼に招いて催した歌会で、与謝野鉄幹・伊藤左千夫・佐佐木信綱・平野万里らが出席した。観潮楼歌会は四十年三月から四十三年四月までつづけられ、二十六回に及んでいる。当初は右の四人だけであつたが、次第に新詩社系の北原白秋・石川啄木・木下杢太郎、根岸派の斎藤茂吉・古泉千樫らの新人が加わり、これらの若い世代の両派の人々の間に相互の交流が生まれるきっかけをつくつた。この歌会に招待された歌人のうちで最も熱心だつたのが左千夫だつたようで、出席の回数も左千夫の十四回に対して、万里十二回、信綱十回、鉄幹九回となっている。当時の左千夫の手紙を見ると、「鷗外博士を前に置き思はず大気烟を吐き散らし顧みて一笑を禁ぜざりし等なかなか愉快に有之候」「彼等ハ可成ダケウせんとする風あれど小生ハ断として論鋒を緩め不申候」などあり、左千夫のこの会に対しての心構えがうかがえる。大正二年八月二日に行われた左千夫の葬儀には鷗外も参列した模様であり、同年十一月発行の「アララギ」六の一〇「伊藤左千夫追悼号」のため鷗外は「伊藤左千夫年譜稿」を執筆し、同誌巻頭を飾っている。

森田義郎（もりたぎろう）

〔概括〕 明治三十三年八月に根岸短歌会に入り、「馬酔木」創

刊にもかかわるなど熱心であつたが左千夫と対立して脱退した。

〔人物〕 歌人。明治一一（一八七八）・四・九、昭和一一（一九四〇）・一・八。愛媛県周桑郡小松町生まれ。本名、義良。明治二十八年に松山中学に入学した。この年は夏目漱石が松山中学に英語教師として赴任してきた年で、義郎の下宿から三軒目に漱石の下宿の愚陀仏庵があり、夏には正岡子規も静養をかねて滞在した。義郎が子規を知るのはこの夏で、句作を始めた。三十三年に上京して国学院に学び、同郷の先輩で、「心の花」の主幹であつた石樽千亦に歌の指導をうけた。千亦は佐佐木信綱の主幹する竹柏会の同人であるから、歌を学ぼうとするなら義郎も竹柏会に入るのが普通であるが、義郎は信綱の弟子になることを拒んで三十三年八月から子規の主宰する根岸短歌会に参加、新聞「日本」の子規選による短歌募集にも出詠した。三十五年一月には千亦の配慮により大日本歌学会の幹事となり、五月には千亦にかわって「心の花」の編集発行人となつた。同誌は信綱の「広く、深く、おのがじしに」という指導理念を反映して、流派にこだわらず広く門を開いていたが、この雑誌の編集発行人に根岸派の義郎がなつていたので根岸派の歌人たちは左千夫をはじめとしてよく投稿した。そのころ機関誌をもたなかつた根岸短歌会にとって、「心の花」に義郎がいて、同誌に自由に短歌や文章を発表できたこと

は、派の結束をはかり、子規の没後は会員の離散を防ぐ上で大きく貢献した。このように義郎は当時、根岸短歌会の中で重要な人物であった。子規がなくなったあと、左千夫は今後の根岸派の進むべき道についての考えを書簡の形式で「師を失ひたる吾々」と題して「心の花」五の一（明35・11）に発表しているが、この書簡は義郎に宛てたものと考えられる。三十六年の「馬酔木」創刊に際しては左千夫や蕨真とともに尽力し、編集員九名のうちに名を連ねているだけでなく「発行者」にもなっている。「心の花」を編集発行した義郎の実務経験が「馬酔木」創刊にも役立ったと考えられる。ところが、間もなく左千夫と意見の対立を生じ、三十六年十二月をもって根岸短歌会を退いた。左千夫と義郎とは根岸派歌人の中では性格的に最も近かったが、そのために反発も強かったらしい。義郎は歌論「歌に対する余が信念」（「心の花」六の一二 明36・12）において「今の歌は余りに小主観である。余りに小客観である。」「国民が先天的に持つてゐる理想——独立した一国の思想とでもいふべきものと離隔してはならぬ。一国の元気を文学特に和歌にも現してほしい。小主観・小客観以外に吾が同胞の思想を代表し、日本国民を代表した歌を詠むべきである。」と主張している。左千夫が「馬酔木」四の一（明40・3）に発表した歌論「一国の元気を顕現せる歌ありや」には先掲の義郎の論

と通う点が多い。左千夫は歌を始めた最初ころには芸術至上主義的傾向を強く持っていたのであるが、それが「馬酔木」の中頃から徐々に歌を人生とかかわらせようとするに至る。この変化の一つの契機として義郎の影響が考えられるのである。義郎は明治三十七年、日本新聞社に入社、のちには右翼政治運動に加わったが、投獄されたり脳をわずらうなどのことがあって家庭的にも恵まれず、晩年は不遇で、昭和十五年一月八日に没した。著書には『短歌小梯』（明36）、『万葉私刪』上・下（明36・明39）、『万葉長歌評釈』（明43）、『万葉短歌評釈』（明44）などがある。

▼さみだれのやうやく晴れて蚊の多き根岸に住みし竹の里人

——「馬酔木」明36・8——

森田草平（もりた そうへい）

〔概括〕 東大で漱石から英文学を学ぶとともに、千駄木の家で開かれた木曜会にも出た漱石門下。漱石のすすめにより左千夫の「野菊の墓」の批評を「芸苑」に載せた。

〔人物〕 小説家。翻訳家。明治一四（一八八一）・三・一九（昭和二四（一九四九）・一二・一四。岐阜県稲葉郡鷺山村（現、岐阜市鷺山）生まれ。本名、米松^{よねまつ}。別号、白楊。明治三十二年に四高に入学したが中退、翌年一高に入学した。一高在学中にドー

デの「サッフォー」の影響をうけて書いた小説「仮寝姿」(明36)が「文芸倶楽部」の一等に入選した。東京帝大英文科に入学、卒業するまでに与謝野鉄幹・晶子夫妻、上田敏らの知遇を得、また上田敏、馬場孤蝶などの雑誌「芸苑」(のち「芸文」)の同人となり「病葉」(明39)を発表している。明治三十八年十一月には、当時、大学で英文学を教わっていた夏目漱石を千駄木町に訪ねて門下となり「木曜会」に出席した。大学卒業後、与謝野晶子が開設した閨秀文学講座の講師となり、そこに出席していた平塚明子(らいてう)を知った。四十一年三月、らいてうと塩原尾花峠に情死行を企てたが未遂に終わった。この事件はスキャンダルとして話題になり、社会的に葬られるところであったが漱石の庇護で救われた。事件に取材した小説「煤煙」は四十二年元旦から「東京朝日新聞」に連載され、一躍、作家として認められた。その続編「自叙伝」(明44)を発表したのち十数年はイプセン、ダヌンツィオらの翻訳を主とした。大正九年から昭和九年まで法政大学において英文学を講じた。大正末期から再び創作の筆を執るようになり『輪廻』(昭2)のほか『吉良家の人々』(昭4)、『豊臣秀吉』二巻(昭16、17)などの歴史小説を書き、そのかたわら『夏目漱石』正・続(昭17、18)という評伝も執筆した。昭和二十年五月、長野県下伊那郡伊賀良村に疎開し、二十四年十二月十四日、六十

八歳で没した。草平は左千夫と直接会ったことはないようであるが、草平が左千夫の「野菊の墓」を読んで感服し、その批評を彼が同人となっていた「芸苑」に載せたことからかわりが生じた。これは、「野菊の墓」を読んだ漱石から明治三十八年十二月三十一日付で「ホト、ギスに出た伊藤左千夫の野菊の墓といふのを読んで御覧なさい。文章は君の氣に入らんかも知れない。然しうつくしい愉快な氣がします。」と推奨の手紙をもらい、この小説を読んだ感想を漱石に手紙で報告、漱石のすすめでその感想を草平が同人となっていた「芸苑」に発表したものである。「芸苑」に載った草平の「野菊の墓」の批評を読んだ左千夫は大いに喜んだ手紙を草平に出したという。

森山汀川(もりた ていせん)

〔概括〕 左千夫が深く信頼した信州「比牟呂」の中堅歌人。

〔人物〕 歌人。教員。明治一三(一八八〇)・九・三〇、昭和二一(一九四六)・九・一七。長野県諏訪郡落合村(現、富士見町落合)生まれ。本名、藤一。諏訪中学卒。明治三十四年から三十数年間、小学教員を勤めた。十八歳のときから俳句をつくり「ホトトギス」に投稿、三十三年には上京して病床に正岡子規を見舞って教えをうけた。短歌にも関心のあった汀川は三十六年に

久保田山百合（島木赤彦）らとともに「氷むろ」（「比牟呂」）を創刊して短歌を発表したが、「馬酔木」にも三十七年七月の十二号から出詠している。「比牟呂」が四十二年に「アララギ」に合同してからはその同人となって作歌をつづけ、昭和四年一月からは選歌を担当した。日常の生活の中から生まれる感慨の地味な詠嘆が特色で、歌集に『峠道』（昭7）、『雲垣』（昭15）、『樹雪』（昭26）がある。

▼かくて生くることをしみじみ考へて鉛筆の先を見つめ居しかな
——「アララギ」明44・11——

柳 本 城 西（やなぎもと じょうせい）

〔概括〕 左千夫が長年にわたって選評を担当した浜松の回覧形式の短歌雑誌「犬蓼」の世話役で、左千夫を深く敬仰した。

〔人物〕 歌人。医師。明治一二（一八七九）・四・四―昭和三九（一九六四）・二・二九。愛知県豊橋生まれ。本名、満之助。

東京医学専門学校に学び、静岡県浜名郡篠原村（現、浜松市篠原町）で医院を開業した。明治三十六年に岐阜から発刊された雑誌「鷄川」に短歌を投じた城西は、同誌に掲載されていた「馬酔木」の広告を見て購読を始め、短歌を寄せるようになった。四十一年六月に楨不言舎、山下愛花、木村秀枝らと浜松において「犬蓼短

歌会」を結成、「犬蓼」と題する手書きの回覧雑誌を作り、これを数名の会員に回覧することにした。その詠草は「アカネ」「アララギ」に載っている。左千夫は四十一年十一月、沼津に木村秀枝を訪問した折、「犬蓼」六号（明41・11）を初めて手にして、同誌に「十一月八日沼津に遊び、たまたま此回稿の来るに会す。一覧して多大の興味を感じたり。体裁、挿画等、凡て真面目なるが最も悦ばし。柳本君の熱心にして用意周到甚だ敬すべし」云々と記した。これが機縁となって同誌五号の「消息」で城西が「正岡先生の後継者なる左千夫先生の御選評を願ひ、熱心にやれば飽く迄も尽さんと心よく諾はれ候」と告げて、左千夫は五号にさかのぼって選評を行っている。左千夫と「犬蓼」との関係はその後も左千夫が死去するまで（「犬蓼」六〇号／＼大2・5／＼まで）つづいている。この雑誌は昭和三十九年八月の「柳本城西追悼号」をもって終刊するまでに五百九十八号を数えた。城西の歌集に

『犬蓼』（白玉書房 昭40・2）がある。

▼わたつみの底鳴りひびき潮ぎらふ磯馴松原月おちむとす

——「犬蓼」明43・9——

山 下 愛 花（やました あいか）

〔概括〕 子規在世中から「馬酔木」時代にかけて作歌した浜松

の歌人。

〔人物〕 歌人。静岡県生まれ。明治三十三年二月十二日の新聞「日本」に載った第二回募集短歌「森」に三首が採用され、子規庵の歌会にも出席するようになった。浜松歌会を結成し、歌を左千夫選で「馬酔木」に載せている。明治三十六年十一月、左千夫は蕨真と「西遊日抄」（「馬酔木」八号 明37・2）の旅で西下した折には、浜松に下車、愛花に会っている。沼津短歌会にも赴いて作歌することがあった。

▼学び舎を帰る処女等輩咲く森の下道分け入りにけり

―「日本」明33・2・12―

結城素明（ゆうき そめい）

〔概括〕 「馬酔木」創刊にあたって編集員の一人となり表紙画、口絵などを描いた日本画家。

〔人物〕 歌人。画家。明治八（一八七五）―昭和三一（一九五七）・三・二四。東京生まれ。本名、貞松。十五歳のとき川端玉章に入門、のち東京美術学校日本画科に学び、さらに三年間、洋画科に学んだ。在学中の明治三十九年に日本画協会第一回展に出品して一等褒状を受けるなど早くから認められた。三十三年には平福百穂らと「无声会」^{むせいかい}を起し、日本画に写実主義の新風をも

たらした。大正八年の第一回帝展から審査員をつとめ、昭和元年には帝国美術院会員となった。昭和十九年まで東京美術学校教授として後進の育成に尽力した。流派関係を脱して洋風日本画を生み出した一人で、庶民の生活に取材した小品が多い。素明が左千夫を知るのは明治三十三年で、互いに親しく交友、三十五年には日本画家の平福百穂を左千夫宅に伴い、作歌に向かわせた。三十六年六月、「馬酔木」創刊の際には編集員九人の中に名を連ね、表紙画を十五号まで担当したほか口絵等をたびたび掲載している。三十七年二月、日露戦争のため素明が召集をうけたとき、左千夫は「素明画伯の出征を送る」と題する短歌四首を贈っており、「馬酔木」一〇号（明37・4）に発表している。

湯本禿山（ゆもと とくざん）

〔概括〕 「アララギ」に熱心に出詠した信州松本の歌人。明治四十五年に禿山が左千夫の家を訪れたのがきっかけとなり、左千夫の「壬子一月湯本禿山に逢うて去歳の信濃を思ふ」と題する連作十一首は生まれた。

〔人物〕 慶応元（一八六五）・三・二七―大正七（一九一八）・七・一八。長野県更級郡御厨村（現、長野市川中島町）に生まれ、旧松代藩士湯本家の養子となった。本名、政治。長野師範を

卒業後、県内で教壇に立ち、のちには郡視学や高等女学校の校長

をつとめた。東筑摩郡視学であった明治四十二年には、そのころ

養鵝に失敗した島木赤彦を管下の広丘小学校（現、塩尻市立広丘

小学校）の校長に招き教職に復帰させた。短歌は明治三十八年に

松本で結成された「あさは会」に加わり作り始めた。左千夫との

かわり、明治四十一年に左千夫が第五回目の信州入りをした

折が初対面で、信州の根岸系歌人の中では比較的遅くから始まっ

たが、以後の交際は密であった。「アララギ」には三巻四号（明

43・5）から出詠しており、大正七年八月の一一巻八号にまで及

んでいる。相撲が好きであった禿山は毎年、春と秋の二回、上京

して両国の大相撲を見るのを例とした。明治四十三年五月にも相

撲を見るために上京した禿山は、十九日、ようやく完成した左千

夫宅の茶室唯真閣で「十九日会」が催されたのに出席している。

左千夫は五月二十七日付の篠原志都兄宛書簡の中に「禿山相撲の

呼出しを閣中ニ嘯鳴つて声四隣ニ震へり」と記している。また、

左千夫は「アララギ」五巻二号（明45・2）に「壬子一月湯本禿

山に逢うて去歳の信濃を思ふ」という副題のある「花と煙」十一

首を発表しているが、この連作は四十四年九月下旬に富士見公園

の設計の下検分のために第五回目の信州入りをしたときのことを

翌四十五年一月に禿山が上京して左千夫宅を訪れたときに詠んだ

作である。

▼つひに我に逆はぬ妻をあやしくも時に物足らず思ふことあり

―「アララギ」明43・5―

与謝野鉄幹（よさの てっかん）

〔概括〕 鉄幹の率いる新詩社は根岸派にとって最も気になるラ

イバル的な結社だったので、左千夫は鉄幹と対立することが多か

った。

〔人物〕 歌人。詩人。明治六（一八七三）・二・二六、昭和一

〇（一九三五）・三・二六。京都岡崎生まれ。本名、寛^{ひろし}。鉄幹の

号は明治三十八年に廃し、以後は本名の寛を用いた。幼いころか

ら父の礼蔵^{れいぞう}に和歌を学び、明治二十五年に上京して落合直文に師

事、翌年直文を中心に「あさ香社」が結成されたときには、その

主要同人として活躍した。三十二年に「新詩社」を結成、翌年に

は機関誌「明星」を刊行して浪漫主義運動の中心となった。「明

星」は四十一年に第百号をもって終刊したが、この雑誌からは与

謝野晶子、山川登美子、石川啄木、北原白秋など、多くの歌人や

詩人が出た。鉄幹の詩歌集には、『東西南北』（明29）、『天地玄

黄』（明30）、『鉄幹子』（明34）、『相聞^{あいぎとえ}』（明43）などがある。

左千夫とのかかわりで最も早い時期のものとしては、明治三十三

年六月の「明星」三号誌上で鉄幹が左千夫作の「元の使者既に斬られて鎌倉の山の草木も鳴り震ひけん」(「日本」明33・5・6)の歌を取り上げて「圧巻の佳作」と称賛したことがあげられる。左千夫の歌が結社の外の人によって認められた最初のものである。このころ歌壇では後年、茂吉らが「子規鉄幹不可併称説」と呼んだ論争が持ち上がっている。これは左千夫が雑誌「心の花」に、根岸派こそ真正の新派であって、その主宰者の子規を他の流派の鉄幹その他と同列に置くべきではないと述べたことが発端になって起きている。全盛期の新詩社に挑戦しようとする新興の根岸派の心意気を見せた事件であったが、子規を尊敬するあまり、根岸派のみをよしとする独善性が目立つ。鉄幹を怒らせるような左千夫の発言はほかにもいくつか見られるが、その一つに「馬酔木」三の三(明39・3)に発表した評論「与謝野晶子の歌を評す」がある。この文章は冒頭で「明星」を罵倒したあと、同誌の代表的な歌人である晶子の歌を七首取り上げて、それぞれの歌に忌憚のない批判を浴びせ、彼女の秀作とされる「遠つあふみ大河流るる国なかば菜の花咲きぬ富士をあなたに」の歌を改作して「国断てる大河に続く菜の花や菜の花遠に富士の山見ゆ」とした。これを読んだ鉄幹は「明星」(明39・5)で「馬酔木左千代氏(マヰキ)の『与謝野晶子の歌を評す』の一文、かばかり正直に自家の魯鈍を表白せ

るものは珍し。詩を評せむとならば、せめて日本語なりとも修養せよ。」と酬いた。このように新詩社と根岸派とは対立することが多かったので、両者の接近を図って森鷗外は明治四十年に自宅で観潮楼歌会を開いて鉄幹や左千夫を招待したのであったが、この歌会でも左千夫は遠慮することなく鉄幹など出席者の作品を批評したらしい。とはいっても、歌会が終わると左千夫・鉄幹・信綱らは夜がふけた千駄木から本郷への通りを並んで親しく語りつつ帰るのが例だったようで、鉄幹は観潮楼歌会にまつわる左千夫の思い出を「アララギ」六の一(大2・11)の「伊藤左千夫追悼号」に「摯実と熱狂」という題で述べている。二人は歌壇においては敵対することがしばしばあったが、体質的には男性的なもの、「ますらをぶり」を好む国士的な精神の持主という点で似るところが多かったと考えられる。

▼韓(かん)にして、いかでか死なむ。われ死なば、をこの歌ぞ、また
廃(すた)れなむ。
——『東西南北』明29・7——

依田 秋圃 (よだ しゅうほ)

〔概括〕 林務官吏としての暮らしの中から山中の天然を歌った歌人。

〔人物〕 歌人。明治一八(一八八五)・一・八〇昭和一八(一

九四三）・一二・三。東京深川生まれ。本名、貞種。秋園という号は、おじにあたり漢学者で劇評家でもあった依田学海がつけたものという。東京帝国大学農科大学林学実科に学び、明治三十九年卒業。林務官吏として愛知県に赴任、大正十三年四月に東京に帰るまで名古屋に住んだ。明治三十八年から左千夫に師事し、「馬酔木」「アカネ」「アララギ」に出詠したが、名古屋では奥島欣人、増田八風らと交わり、「阿由知短歌会」を開いた。四十四年に作歌上の見解の不一致の故をもって「アララギ」を離脱した。欣人の影響もあってか、山中の天然を詠じた写生歌に特色を見せた秋園は左千夫の主情的傾向に反発したのである。大正十年には浅野梨郷と「歌集日本」を刊行、十三年に廃刊してのちは、「あけび」「武都紀」等に作品を発表した。歌集に『林間歌集』(大4)、『山野』(昭5)、『溪声』(昭18)がある。

▼峯ちかき梅のむらだち花稀れに節だつ枝に月傾けり

―「アララギ」明44・2―

若山牧水(わかやま ぼくすい)

〔概括〕 牧水の『別離』が出版されたとき「アララギ」は、左千夫を中心に同人六人が作品を丁寧批評した。感情の流露した響きのある牧水の歌を左千夫は評価している。

〔人物〕 歌人。明治一八(一八八五)・八・二四―昭和三(一九二八)・九・一七。宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷生まれ。本名、繁。明治三十七年に早稲田大学英文科に入学、この年から尾上柴舟に師事して「新声」に歌を発表した。四十一年、大学を卒業し、処女歌集『海の声』を出版。四十三年、雑誌「創作」を創刊し、歌集『別離』を上梓した。この歌集の浪漫的な青春の哀歎を歌い上げた抒情歌風は世に迎えられ、歌人としての地位を得た。その後の歌集に、『路上』(明44)、『死か芸術か』(明45)、『みなかみ』(大2)、『溪谷集』(大7)、『山桜の歌』(大12)などがある。旅と酒とを愛し、流露する抒情性に特色を見せた。明治四十三年四月に『別離』が刊行されると「アララギ」三の五(明43・6)は「短歌研究」欄で『別離』から六首を抜いて、左千夫・茂吉・千櫓・赤彦・里静・純の六人で合評を行っている。これは十七ページにもわたる念の入った批評であって、このことは「アララギ」の同人たちがこの歌集を批評に価する作品であると認めたということになる。春^{はる}白^{しろ}昼^{ひる}ここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり」の歌について見ると、純のように「一読して調子の悠つたりした春らしいところもちのする歌である。繰返し繰返し誦して飽きない歌である。」という好意的な批評もあるが、赤彦の「全体の想が有り触れたるものであり、現はし方にも僅があり、

歌集などからは省くべきである』とか、左千夫の「歌題は甚だ面白い直に同感の起る詩題である。けれども例に依て此詩話を話すべく、詞句の構成は頗る粗笨である。」といったように措辞の蕪雑を批判するものが多く、左千夫はこの歌を「静かなる春の真昼を煙立て茲には寄らず行く舟のあり」となおす始末であった。これを読んだ牧水は「創作」一の六（明43・8）に「樅の木蔭より」という文章を書き、「少し位い眼がすがまうと口がゆがまうと私は生きた人間が詠み度い」「諸氏が常に斯くの如き態度を以て歌に臨んで居らるるならば、角を矯めんとして酷殺せらるる牛の数が無かし夥しい事であらう」「左千夫氏の批評は皮膚も干乾びはてた場末の荒物屋の主人でも云ひ相なことであると少し悲観した」と報いた。これに対し左千夫は「アララギ」三の八（明43・10）に「アララギの評論に対する創作の批評に就て」を書いて反論している。なお、「創作」一の五（明43・7）は「自選歌号」で、左千夫の自選の歌二十三首を肖像写真とともに載せているし、同誌二の三（明44・3）は「二月の歌」欄に左千夫の連作「冬のもり」の中から五首を載せ、「アララギ」について、「いつ見ても実に快く忝く思はず」雑誌であると述べている。左千夫が死んだ際には「創作」三の二（大2・9）は「伊藤左千夫翁の死を哀悼す」という追悼文のほかに茂吉と千樫の「伊藤左千夫先生が事ど

も」という文章を載せている。左千夫と牧水は感情の流露した豊かな調べの歌を詠む点で共通する所があり、誌上で対立することはあっても互いに歌人として認め合っていたのである。

▼幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

―『別離』明43・4―

蕨 檀堂（わらび きょうどう）

〔概括〕 蕨真の弟。結婚したとき左千夫は一首ずつ十日間歌を贈って祝福した。

〔人物〕 歌人。明治一二（一八七九）・六・三〇昭和二三（一九四七）・二・二五。千葉県山武郡睦岡村埴谷生まれ。本名、直治郎。蕨真の弟。明治三十四年に左千夫が埴谷に蕨真を訪問したときに会ったのが初対面で、以後、檀堂はたびたび左千夫の家を訪れている。「馬酔木」「アララギ」に歌を投じた。三十六年三月、檀堂が結婚したとき左千夫は毎日一首ずつ十日間、祝婚の短歌を贈った。「馬酔木」創刊号（明36・6）に「蕨檀堂が新婚を祝ぎて」と題して発表された十首がそれである。檀堂は大正十三年、寒川鼠骨らと「子規庵歌会」を始め、歌を「日本及日本人」に発表するようになった。歌集に『檀の実』『山楸』がある。

▼岩が根の姫神山の頂に立ちて吾聞く駒どりのこゑ

―『馬酔木』明38・7―

蕨 桐軒（わらび とうけん）

〔概括〕 蕨真のいところで、左千夫から本所茅場町の無一塵庵を譲り受けて住み、左千夫の死の直前の三ヶ月を最も近い所で暮らした人。

〔人物〕 歌人。明治一三（一八八〇）・八・三〇～昭和二五（一九五〇）・四・四。千葉県生まれ。本名、一郎。蕨真・檀堂のいとこ。「馬酔木」の初期から歌を載せ、「アララギ」では編集にもかかわったが、四十二年に蕨真と対立、蕨真が絶交を宣告したので「アララギ」から退いた。この対立について左千夫は蕨真に自重をうながす手紙を送っており、仲裁に努めたが成功しなかった。左千夫が経営していた牛乳搾取販売の仕事は、晩年においてはたび重なる水害などのためうまくいっていなかった。そこへ、地主から地代の大幅な値上げを要求されたので、大正二年四月三十日付で母屋の無一塵庵を桐軒に売り渡して、地代の安い市外の大嶋町亀戸六丁目に移った。しかし、左千夫は茶室の唯真閣はそのまま茅場町に残して、暇を見つけて始終読書や執筆のためやってきたという。そのため、桐軒は左千夫の晩年の九十日間をすぐ近くで暮らすことになった。そのことを桐軒は「アララギ」六の一〇（大2・11）「伊藤左千夫追悼号」に「最後の九十日」

という題で記している。

▼植木むろの鉢のことごと日とよみさ庭出せば春の風吹く

―「馬酔木」明39・3―

岡 千里（おか せんり）

〔概括〕 甲州の根岸系の短歌会「楓会」の中心として活動した歌人。「馬酔木」「アララギ」に積極的に歌を投じ、左千夫の信望が厚かった。

〔人物〕 歌人。明治一五（一八八二）・一・一五～昭和二七（一九五二）・一二・一七。山梨県東山梨郡諏訪村（現、牧丘町）の人。本名、新次。明治三十八年から「馬酔木」に歌を投じ、左千夫に師事するようになり、「アララギ」にも引き続き歌を寄せた。同志には大正三年六月の七巻五号まで歌が見える。「楓会」は千里と日原無限が中心となって明治三十八年に結成されており、根岸派の同人たちを東京から招じて御嶽歌会を開いたり、信州の「比牟呂」同人たちと交流したりしている。三十九年十一月に千里の家を訪れたときの歌が「馬酔木」四の一（明40・3）に載った「峡中所観」と題する連作で、その詞書に「丙午初冬峡中恵林寺々畔の同人を訪ふ」云々とあるが、「恵林寺々畔の同人」は千里を指している。この時、左千夫は千里宅に三泊した。左千夫は

四十一年十月にも千里の家を訪れている。明治の末年に茂吉・赤彦、文明らが歌壇の他の流派の影響をうけるなどして新しい傾向の歌を詠むようになり、それを認めない左千夫から離れていったときも、千里はそれに追隨しなかった。左千夫は千里の歌について、「千里君は諸同人中唯一の多作家なり。如何なる事柄も歌にせざれば止まざるものに似たり。其口を突いて出る作歌は又悉く一種の気分をおぶ。近日同君書を寄せて懇切に予の厳選を望み来

る。予は同君の熱誠に感じ、今回の稿は予の満足し得るまでに選びたり。」（「アララギ」五の三 明45・3）と記して千里への信頼を示した。千里は明治四十四年に歌誌「晴耕」を創刊した。歌集に『千里歌集』（昭28）がある。

▼ここにして笛吹川の下つ瀬に立つ秋霧を汽車過ぎる見ゆ

―「アララギ」明42・1―